

北駕文庫蔵『十六夜日記』(注釈書)の解説と翻刻

松原一義

はじめに

古来、『十六夜日記』の注釈書として知られていたのは、高田与清による文政七年(一八二四)二月版の『残月抄』(国文注釈全書所収)である。しかし、この注釈書の原本は正徳二年(一七二二)十二月筆写であり、すでに『残月抄』より百年以上前には成立しており、その読みの深さにおいても、『残月抄』を凌ぐところがある。かつて同種の写本、多和文庫蔵『十六夜日記』をとりあげて報告したことがあるが、本書はその原本と見なされ、翻刻についても、訂正したいところがあるので、ここに簡単な解説を付し、翻刻紹介をしたい。

【解説】

この本は、一冊本であり、装訂は、白色の糸(後補)で袋綴、料紙は楮紙、縦二十二・七センチ、横十六・二センチである。縹色の地に横刷毛目の表紙の左に、黄色地に白の水玉文様の題簽(鳥の子、後補)があり、そ

れに、「いさよひ日記」と外題を記す。また、表紙右上に白紙(四・一×二・二)を貼付し、その上にラベル(三・一×一・七)を貼付、「小八八」と朱書する。さらに、右下に、赤枠のラベル(二・九×二・二)に青字で「小(34)一八八」と記す(表紙見返し右上にも)。

見返しは、本文共紙で、中央には、杉園主人の次の識語が記される。

こは父君のいとわかき時の

御筆なり其時代は奥の

識語にもし給ふを見て

あきらかなり 杉園主人

第二丁表右端に、「いさよひ日記」と内題を記し、その下方に「杉園蔵」(三・八×一・二、朱の蔵書印がある。前後表紙を含め計四十七丁。識語は、一面九行で、漢字仮名交じり文である。注釈部分になると、一面に九行程度書ける大きさの本文に、一字下げ、小さい字(一面二十三行程度書ける大きさの字)で、時には割注のかたちで、適宜、注釈が書き添えられている。

奥書によれば、この本は、正徳二年十二月、町尻三位(藤原兼豊)によつ

て書写されたものを、文化十五(二八一八)年二月、「明真」が伝写したものである。

先の識語によれば、この写本は、杉園主人(小杉楳邨)の父親、五郎左衛門明真の若い時の筆跡と見なされており、蔵書印によれば、その小杉楳邨(一八三四—一九一〇)の所蔵であったと考えられる。

また、相当数の朱の書き入れがあるが、それは和歌や作品名、文章の句切れに付されたものであり、奥書の朱書との関連から、おそらく明真によるものであろうと判断される。

小杉家は代々阿波国蜂須賀家の陪臣(家老、西尾氏の臣)であり、明真は和漢の学に通じ、詠歌は地下の二条家と言われた有賀長基の高弟であった。楳邨はその父から詠歌、物語、草子などを学んだと言われ、元服して西尾志摩に仕え、安政元年(一八五四)西尾氏が江戸詰となったのに随従して約一年間江戸に在住している。その時、古学館に入門して、黒川春村、萩原廣道などとも交誼を結んでいる。

この小杉楳邨旧蔵で、その識語を有する多数の貴重書が北海学園大学北駕文庫に所蔵されていることは、注目に値する。

翻刻

凡例

- 一 底本は、北駕文庫蔵「いさよひ日記」(小(34)88)によった。
- 一 翻字にあたっては、本文部分を大きく、注釈部分は小字で記し、改行については無視した。ただし、本文中の和歌については、本来上の句と

下の句の二行に分かち書きにされているものが多いが、一行で書かれていたものもある。その冒頭と上下句の間を一字あきに統一して記した。

一 各注釈に通し番号を付した。

一 丁数および表裏の別を、例えば、次のようなかたちで示した。

〈一オ〉〓 一丁表のこと

〈二ウ〉〓 二丁裏のこと

一 漢字は、できるだけ原本どおりにしたが、異体字についてはほぼ通行体に改めた。

一 判読不可能な本文は、で示し、仮読を記入した場合もある。

一 誤りと思われる箇所には、右傍に(ママ)と記した。ただし、「え」と「へ」などの仮名づかいの乱れについては特に記さなかった。

一 見せ消ちは、||| によって示した。例： 朴せ

一 補入は、() の中に入れて示した。

一 上部が切断された頭注があったが、切断部分の復元がむづかしいので省略した。

一 朱による書き入れのうち、読点及び濁点は省記した。

一 参考のために、本文と注釈との間に、「十六夜日記校本及び総索引」(江口正弘編、笠間書院刊)により、() の中に相当する掲載頁および行を記した。漢数字は頁数、アラビア数字は行数を示す。

なお、阿仏仮名諷誦については、「阿仏仮名諷誦」校本稿「拙稿、鳴門教育大学研究紀要(人文・社会科学編)、第19巻、二〇〇四年によった。

【翻刻】

いさよひ日記

〈表紙〉

こは父君のいとわかき時の御筆なり其時代は奥の識語にもし給ふを見て
あきらかなり 杉園主人

〈見返し〉

いさよひ日記

此いさよひの記は大納言為家卿の室阿仏の作なり為家の卿は俊成卿の孫也
定家卿の子なり阿仏は前但馬守平繁廣か娘也安嘉門院の右衛門のすけとい
ひし女房也後には名を四條と改む阿仏は法名なり勅撰にも哥数おほく入た
る哥人也爰に為家卿の惣領を大納言為氏卿と言ひこれ阿ふつの為に他腹
たりといへ共為家卿の本妻の惣領ゆへに家督をつき給ひし也然に阿仏腹の
為相卿を世にたてん連(一才)北條時宗執権の頃親子ともかま倉へくたり
家督の詔詔せられしときの日記也とそ(一ウ)

【序文・旅の記】

1 昔壁の中より求め出たりけん文の名をは今の世の人の子は夢ばかりも
身のうへの事とはしらさりけりな(二〇一・1) 是迄此日記の序分マツマツの様
に書き扱壁の中よりと書出たるは昔もろこしの秦始皇と申込みと無道におはしま
して孔子の道をきらひて儒書をやき捨られし古事也されはこれをおしみてその世
の人かの書物を壁の中へぬり籠てかくし置たり五六十年已後漢高祖の時かへの中

より孔子の給ひし事を書たる論語といふ文を取出して今の世迄も傳はれる也爰
に文の名をはと書るは論語をさしていへる也身のうへの事と書るは論語は君臣父
子夫婦兄弟朋友の五倫の道をあかしたる書なれば我身の時に逢ぬ述懐にこめて身
の上の事とはしらさりけりなといひしこと葉也

2 水荃の丘の葛はらかへすくも書おくあとたしかなれともかひなきも
のは親のいさめ也けり(二二才)(二〇一・4) 水荃岡近江國の名所也水く
きの岡といへる心は為家卿の書置給ひし筆の跡儘に有といふ心也筆をみつくま
いふ故なりくすはらとは返すくといはん連の枕詞也親のいさめとはおやの教訓
也

3 又賢王の人を捨給はぬまつりことにももれ(二〇一・6) けん王と
は一天四海をしらしめして民をめぐみ給ふをいふ也

4 忠臣の世を思ふなさけにも捨らるゝは数ならぬ身ひとつなりけりと思
ひしりなは又さしてもあらで猶此うれへこそやるかたなくかなしけれ
(二〇一・7) 君々たれば臣々たる道をもつて賢王に仕へ奉りて世をは納る
事なれと其恵にももれたるを我身を述懐していへり前のろんこを爰にうけていへ
る詞也なをこのうれへに子の字をもたせていへり

5 さらに思ひつゝ、くれは(二〇二・1) 今更に也

6 やまと哥の道はた、誠少く仇なるすさみはかりと思ふ人もやあらん
(二〇二・1) 此やまとを大和の国と口にていふよみ様によむへきにや古今
集のやまとうたは人の心を種としてといふやまとのよみ様家々の口傳様々有夫と
同じよみ様成へし(二二ウ)やまあとうたとよむ心もち也扱爰の心は今更阿仏の心
を思ふに和哥の道は人心なれば皆誠より起る也然るに我家のかく衰ふるは哥は

た、仇なる獄一へんの様に人は思はんとなり和哥の道の誠に有物ならばかく我家のおとろへはあるましきものをといふ心を只誠すくなく和哥の道はあたなるすさひはかりのやうなりといへり

7 日の本の国に天の岩戸開けし時より四方の神たちの神楽のこと葉をはしめて(一〇二・三) 是は日神岩戸に閉籠給ひ天か下常聞と成し時岩戸の前にて諸神集り神楽をなして日神ふた、ひ四海を照し給ふ事也

8 世をおさめものを和くるなかつたりけるとそこの道の聖たちはしるしおかれたり(一〇二・五) 中たちとは哥道をさしていへり此道の聖とは和哥通達の人をさしてこの道の聖といへり和哥は世を納め物を和らくる天下國家を治る中たちとなる徳の深きものと昔よりいへりと也

9 扱も集をえらふ人はためし多かれとふた、ひ勅を受けて世々に聞へ上たる家は類ひ猶ありかたくやありけん(一〇二・八) 集をえらふとは撰集也為家卿は人王八十七代後 嵯峨帝續後撰集又同御代續古今集兩度の撰者也其後打つ、き代々の勅撰為氏卿より為世卿為兼卿為定卿為明卿みな此家の撰者也(三オ)

10 そのあとにしもたつさはりてみたりのおのこ、とも(一〇三・一) みたりは三人也阿仏の子為相卿為頭卿為守等也此三人は阿仏はらの子也

11 百千の哥の古ほくともをいかなるえにかありけんあつかりもたる事あれと(一〇三・二) 百千とは哥数多き事はくは反古也もたるとは持たる也えには縁也

12 道をたすけよ子をはく、め後の世をとへとて深き契を結び置れし細川の流も故なくせきとめられしかは(一〇三・四) 為家卿の世々の知行所

播磨国細川の庄也夫をま、子の為氏卿に押領せられたるを故なくせき留る、といふ也深き契を結ふせきとめの詞細川といふえんの詞也

13 跡とふ法の燈も道をまもり家をたすけん親子の命もろ共にきへをあらそふ年月をへてあやうく心細きながら何としてつれなくけふ迄はなからふるらん(一〇三・七) 前に後の世をとへと為家卿の遺言をうけて跡とふ法といへる也次の詞のきへをあらそふももし火にか、りたる詞也あるかなきかの心もおちふれたる身のなを便になからへたるそと也(三ウ)

14 おしからぬ身ひとつはやすく思ひすつれとも(一〇四・一) 阿仏身命也

15 子を思ふ心の闇は忍ひかたく(一〇四・二) 一人の親の心はやみにあらねとも子を思ふ道にまといぬる哉

16 道をかへり見るうらみはやらんかたなく(一〇四・三) 為氏卿は本版の子にて家督なれ共阿仏のためには腹替り也俊成定家為家とつ、きて為相卿はうつもれば代々和哥の道筋をつかぬ事を道をかへりみるうらみといふ也

17 扱も猶あつまの亀の鏡にうつさは曇らぬ影もやはる、と(一〇四・四) 4) 亀の鏡也あつまとは爰にては鎌倉をさす也くもらぬ影とはまつりことのと、しきを鏡のくもらぬにかけていへり

18 せめて思ひのあまりて萬のは、かりをわすれて(一〇四・五) 都にては諸卿の評判又鎌倉の執権などをこめて萬の一字にみるへし

19 身をよくなきものになし果て(一〇四・七) 用なき也

20 ゆくりもなくいさよふ月にさそはれて出なんとそ思ひなりぬる(一〇四・八) ゆくりもなくは不意と苦心ならずとよむ也許すの心也。源氏夕顔の巻

にへいさよひの月にゆくりなくあくかる、とあり思ひの外の心也此詞よりいへるか爰にいさよふ月にさそはれてとあはれは十六日の月しろあかりていまた出やらぬ頃なるへし夜更で出る月をは不知夜月と書也爰にいふいさよひいさとさそはる、也家隆卿のうたに(四才)へ人ならば都にみまし宮木野、萩をいさよふ秋の夕暮

此いさよふはさそふ儀也爰のいさよふ月といふ詞と同じもの也又人丸のうたへもの、ふの八十うち河の網代木にいさよふ浪の行えしらすも 此いさよふは休らふ義也又へ君や来し我や行んのいさよひに楨の板戸もさ、て寝にけり 是も立休らふて寝ぬ心也かやうに様々の心あり哥心による此日記のいさよふはさそふ儀にみるへし爰のこと業よりいさよひの日記といふ也

21 さりとては文屋康秀かさそふ水にもあらず(一〇四・9) この詞にてさきのいさよひはさそふ義分明也へ侘ぬれは身はうき草のねをたえてさそふ水あらはいなんとおおもふ 此うたにていへり是は康秀三河掾になりて国の仕置に下る時小町を俱して行んといひし時小町かよめる哥也夫をこ、引出られし也

22 すむへき國もとむるにもあらず(一〇四・10) 阿仏の住んと思ふ國もとめにも行すた、此事をうたへんとて鎌倉におもむくと也

23 頃は三冬たつはしめの空なればふりみふらすみ時雨もたへすあらしにきほふ木の葉さへ涙と共にみたれちりつ、ことにふれて心ほそくかなしけれと(一〇五・1) 冬三ヶ月のうちに十月は始の冬也然は三冬たつ始といへりふりみふらすみはふりふらす空定なき也ことにふれては物毎にふれて也景気ありくとして文章あはれ也(四ウ)

24 人やりならぬ道なれはいきうしとてもと、まるへきにもあらて何となくいそきたちぬ(一〇五・5) 我と行道なれは人やりならぬ也(古今源実

へ人やりの道ならなくにおほかたはいきうしといひていさ帰らん 此哥にて申されし也此本哥の心はいきうしとて帰らんと也人のやる道にてはなし我とゆくほとにと也然るに爰に心を取替て我心からわさと行程に今更と、まるやうもなしといへり文章上手めきたり

25 目かれさりつるほとたにあれまさりつる庭もまかきもましてとみまわされて(一〇五・7) 目かる、といふはみる事のうとき事也爰は常に阿仏の見なれし庭もせなとはめかれねともおもひなしにやあれたる心ちすると也。源氏巻柱にも此筆法ありさしも思はぬ水草のもとさへ恋しからん事とめと、めてといへり

26 したはしけなる人くの袖のしづくも慰めかねたる中にも侍従大夫なとのあなちにうちつくしたるさま(一〇五・9) 侍従は為相大夫は為頭なるへし

27 いと心くるしければ様く言しらへねや(五才)のうち見れば昔の枕のさなからかはらぬを見るも今更かなしくてかたはらにかきつく(一〇六・2) 昔の枕とは為家卿の事也鎌倉へ下らんと思ふも家を思ふか故也ければ今更なき人のおも影そひてかなしけれそのかたわらに哥をかきつくると也

28 へと、め置古き枕の塵をたに 我立さらは誰かはらはん(一〇六・6) 是は長恨哥に。旧枕故衾誰与共 此詞より出たり是は唐の玄宗皇帝楊貴妃に分れて蜀の國より帰り二たひ内裏におわしまして楊貴妃ともる共にみ給ひしねやを見て歎き給ひし詞也哥の心あきらか也

29 代々に書置れたる哥のさうしとものおくかきなどしてあたらぬかきりえりした、めて(一〇六・8) えりとはえらふ也俊成定家為家卿定代々

書おかれしそ^なうしなるへし

30 侍従の方へおくるとて書そへたるうた へ和哥浦に書と、めたるもし
ほ草 これを昔の形見ともみよ(一〇六・10) 是風哥也^な代々の人の書置
れしものを和哥の浦にたとへていえりもしほ草は浦の藻とつけて草子どもの事也
哥の心ありのま、也(五ウ)

31 あなかしこよこ波か、る濱千鳥 ひとかたならぬ跡を思は、(一〇
七・4) 心明らか也あなかしこはあなかた也いてくといふ心也濱千鳥は筆
の跡也爰にては侍従をさして濱千鳥といふ也ひとかたならぬとは代々也是も風の
うた也

32 是を見て侍従の返り事いとくあり へ終によもあたにはならしもし
ほ草 形見をみよの跡に残さは(一〇七・6) 心明らか也形見を見るを
三代にかねて成へし三代相傳の書を家に残し置たらは終によもあたにはならしと
なり五句よみはて、二の句返返して見るへき也

33 へまよはましおしへさりせは濱千鳥 ひとかたならぬ跡をそれとも
(一〇七・9) 此うたは二句より一の句へ返してみる也是も五句よみ果て二
の句へ返してをしへさりせはまよはましと也今母上のおしへにて三代の跡をもみ
へたる也

34 この返り事いとおとなしければ心やすふ哀れなるにも昔の人にきかせ
たてまつりたくて又打しほれぬ(一〇八・1) 昔の人とは為家卿也
35 大夫のかたはらさらず馴きつるをふり捨られなん名残かちにおもひ知
て手ならひしたるを見れば(六オ)はるくとゆくさきとふくしたはれて
いかにそなたの空をなかめむ(一〇八・3) 大夫為頭の哥也當坐の哥

はかやうにすらくとよむは一跡也

36 とかきつけたるものよりことに哀にて同しかみに書そへつ つくく
と空ななかめそ恋しくは みちとをくともはや帰りこん とそなくさむ
る(一〇八・8) 前の哥へつけてみる詞也 伊せものかたりのとなんをひつ
きていひやりけるの詞におなし

37 山より侍従の兄の律師も出たちみんとておわしたり(一〇九・2)
山とはひえの山也律師は名を慶融といふ也

38 それもいと心細しと思ひたるを此手習ともを見て又書そへたり あた
になく涙はかけたひころも こゝろのゆきて立かへるほど(六ウ)(一
〇九・4) 哥の心は聞へたるま、也やかて立婦給はん程に涙はかけました
ひの門出にいましき程にと也立かへるは衣のえん也

39 とはここといみしなから涙のこほる、を(一〇九・8) とはとよみ切
てここといみしとよむ也ここといみしは言忌也涙はかけしといみなからなくと也

40 あら、かにもの言まきはすも様く哀なるをあさりの君は山ふしに
て此人くよりは兄なり(一〇九・8) 阿闍梨也名を源承といへり續拾
遺集の作者也

41 このたひの道のしるへにをくりたてまつらんとて出たるを此手ならひ
に又ましらはさらんやはとてかきつく(一一〇・1) ましらはさらん
やは交らんといふ詞也やはのてにをは皆此心持にてみるへき也

42 立そふそ嬉しかりけるたひころも かたみにたのむおやのまもりは
(一一〇・5) あさりの歌也前に旅衣立かへるとあるをうけて立そふそと也
此あさり阿仏の供して道の案内者に鎌倉を送り給ふ故に立そふそうれしきと也か

に時雨さへふりてあとに心のひかる、故也此哥玉葉集旅の部に入たり詞書に▲あ
つまへまかりけるに野路といふ所にて日暮か、りて時雨さへうちそ、きければと
有

54 今宵は鏡といふ所に着へしと定めつれと暮果て行着す(一一三・五)
か、み近江の名所也古哥も多し

55 もり山といふ所にと、まりぬ爰にも榎時雨はしたひきにける いと、
猶袖ぬらせとややとりけん まなく時雨のもる山にしも(一一三・六)

時雨そしたひの詞をうけていと、猶袖ぬらせとてやとりたるかともまなくはひ
まなく也守山を所の名にいふ時はもり山哥によむ時は大かたもる山とあり貫之
へ白露も時雨もいたくもる山は下葉残らず色つきにけり もり山の哥は(九才)
露か時雨に大かたよむ故もる山とよみならはせり

56 けふは十六日の夜也けりいとくるしくて打ふしぬいた月のひかりか
すかに残たる明ほのにもり山を出てゆく(一一四・一) 十六夜は有明
也月の光かすかに残る也

57 野洲の川わたる程さきたちてゆく旅人の駒のあしおとはかりさやかに
て霧はいとふかし 旅人もみなもろともに朝たちて 駒うちわたすやす
の川霧(一一四・三) 心かくれなし朝立ては旅人と霧との縁也此哥も玉葉
集旅の部に入たり

58 十七日はをの、宿といふ所にと、まる(一一四・八) かなにては
すくとよむ

59 月出て山のふもとに立つ、きたる松の木のまげちめみへていとおもし
ろし(一一四・九) 立待の月とて宵より出たる月也月にて木の間のわかちみ

へたるをけちめと語り(九ウ)

60 爰もよふかき霧のまよひにたとり出つ(一一四・一〇) 爰ももの字
前の野洲の川霧にこたへてこ、もといへり上手の文章也

61 さめか井といふ水夏ならば打過ましやと思ふにかち人は猶たちよりて
くむなる(一一五・一) 同し近江名所さめか井とて名水あり夏ならば打過
ましや立寄て汲んにと世され共かちにてとふる人は名水故に立寄て汲と也打過ま
しや此やの字あたりてみるへし

62 むすふ手ににこる心をす、きなは うき世の夢やさめか井の水(一一
五・四) きこへたる儘也但此爰世の夢といふ所此哥の眼也貫之古今のうたの
へむすふ手の掣ににこる山の井の哥の佛をとれりさてうき世の夢とは生死長夜の
夢也又金剛經には一切(有)為法如夢幻泡影と解給へり皆うき世のゆめ也

63 とそおほゆる(一一五・六) すへの哥へつけてみるへし
64 十八日みの、國関の藤川わたる程に先思ひつ、ける(一〇才)(一一
五・六) 関の藤川名所也撰関はいつれも藤氏なる故に関の藤川とよむ也為家
卿も藤原氏成は先といふ字力あるもの也

65 わか子ともきみに仕へんためならて わたらましやは関のふし川(一
一五・八) 心あらは也子を世にたて、君に仕へんと思はずはなににわたら
んと也為家卿も御堂関白道長公のなかなれはかくいふ也

66 ふはの関屋の板ひさはは今も替らさりけり ひまおほきふはの関屋は
此ほとん 時雨も月もいかにもららむ(一一五・一〇) 古哥にへ荒はて

しふはの関屋の板庇月もれ迎やまはら成らん 此を東哥に取り
67 関よりかきくらしつる雨時雨に過てふりくらせは道もいとあしくて心

より外にかさぬひの駅といふにと、まる(一〇ウ) 旅人はみのうちは
らふゆふくれの あめにやとかる笠ぬひの里(一一六・三) 蓑に笠と
たいしていへり雨にやとかるに笠縫の里おりに逢たるもの也

68 十九日又爰を出て行夜もすから降つる雨にひら野とかやいふ程道いと
わろくて人かよふへくもあらねは水田のをもそさなからゆく明るま、
に雨は降すなりぬひるつかた過行道にめたつ社あり人にとへはむすふ
の神とそきこゆるといへは(一一六・八) みの、国に有勅撰にみへたり
69 まもれた、契りむすふのかみならば とけぬうらみにわれまよはさて
(一一七・五) 心あらは也結をとけぬと受たりとけぬ恨とは此度の望を叶へ
て守り給へと也(一一オ)

70 すのまたとかやいふ川には舟をならへてまさ木のつなにや有んかけ
と、めたる浮橋ありいとあやうけれ共わたる(一一七・七) まさきの
つなとは袖人のまさきのかつらといふものをつなにして筏を流し又と、むる処に
もこれにてつなく也

71 この川つ、みのかたはいとふかくてかたは浅けれと かたふちの
深き心はありながら 人めつ、みにさそせかるらん(一一七・10) 人
めつ、み人のみるめをつ、むを川の堤にたとへたりへ思へ共人目つ、みの高けれ
はかとはみながらえこそたのまね 古今恋のうたの俤をとれりへかりの世のゆ
き、とみるもはかなしや身のうき舟をうきはしにして うきたる身をはしにかけ
てかりの世のゆき、とするはともにはかなしと也

72 と思ひつ、ける(一一八・5) 前へつ、けてみる也

73 又一の宮といふ社を過とて 一のみや名さへなつかしふたつなく み

つなき法をまもるなるへし(一一ウ)(一一八・5) ふたつもなくみつも
なき一乘法華をたもつ阿仏成は夫を守り給ふ一の宮ならはなつかしきと也このな
つかしきはたのもしきといふ心にみるか面白き也

74 廿日おはりの国おもと、いふむまやを出てゆくよきぬ道なればあつた
の宮へまいりて(一一八・9) よきぬとは道筋にまします神なればよきら
れぬ也

75 硯取出てかきつけて奉りけるうたいつ、いのるそよ我思ふ事なるみ
かた かたひくしほも波のまに(一一九・1) なるみかたおわりの
名所也あつたの海添也なるみかたかたひくもした心あるかまに(一)とは神にまか
せ奉る程に神の御心ま、にと也

76 なるみかたわかの浦風へたてすは おなし心に神もうくらむ(一一
九・4) 身の上の和哥の道をそへていへり哥は神代よりつたはれは我思ふ祈
りを神もうけひき給はんと也(一二オ)

77 みつしほのさしてそきつるなるみかた 神やあはれとみるめたつねて
(一一九・6) 神や哀といふに我身のうへをいへり風の哥也

78 雨風も神のこ、ろにまかすらん わかゆくさきにさはりあらすな(一
一九・8) 雨風の難も皆神の御心ならん程に旅の道さはりなきやうにといの
る也

79 契りあれや昔もゆめにみしめなは た、爰にしもめぐりあひぬる(ナ
シ) 此哥一首おほかたのほんにおちたり哥の心は昔三河の国宮路山迄阿仏の
父とともなひて下り給ひし時此あつたをとり給ふ故に久しき事なれば昔も夢に
見たると也今又ふた、ひ拝み奉るへき契りあれやと也みしめ細心にかけてといひ

てむかしのちきりにめぐり逢とは夢に對していへり

80 塩ひの程なればさわりなくひかたを行おりしも濱千鳥いと多くさきたちて行もしるへかほなるこ、ちして(二二ウ)(二一九・10) 濱衛の先

たちて行は旅の道しるへするやう也となり旅行のさまあわれ也

81 濱千鳥なきてそさそふよの中に あと、はんとは思はざりしを(二二〇・3) 鳥の跡と受たる詞也為家卿の事なるへし跡とはんとは為家におくれ

て跡とわんと也夫婦は借老同穴のかたらひをなして死なはともにと契れ共老少不定のならひなれば跡とわんとはかけてはおもはざりしを也哀ふかし

82 すみた川の渡りにこそありと聞し都鳥といふ鳥の嘴とあしとあかきは此浦にもありけり(二二〇・5) はしとあしとあかきはいせものかたりの詞にていへり

83 こと、はんはしとあしとはあかさりし わかすむかたのみやこ鳥かと(二二〇・8) 業平朝臣の名にしおは、いさこと、はんのうたにていへり詞も心もさながら取たる哥也

84 ふたむら山をこへてゆくに山も野もいとどをくて日も暮はてぬ(二二〇・10) 山も野もはふたむら山より行先の野山也(二三〇)

85 はるくとふたむら山を行すきて 猶すゑたとる野邊の夕やみ(二二一・2) 前書の体をすくに述たる歌也旅行のていあわれ也ふたむら山は尾張

国の名所也

86 やつはしにと、まらんといふくらさにはしもみへすなりぬ(二二二・4) 此詞もまゑの日も暮はてぬといふ詞をうけて也

87 さ、かにのくもてあやうきやつ橋を ゆふくれかけてわたりぬる哉

(二二二・6) 蜘蛛の手八あれはやつはしといへり夕くれかけてもはしのえん

也又伊せ物語に水行川の蜘蛛といふはたてよこに流れたるに柱をうち遠へたるものを蜘蛛といふ也伊勢物語にも説く有此哥玉葉集旅の部に入たり夕くれかけてわたりかねぬると下の句を直して入たり詞書に。三河国やつはしを通る逆と有哥の心はさ、かには蜘蛛也蜘蛛の巢はあやしきもの也それをやつはしのくもてのかなた

こなたへわたしたるにそへてあやしきに夕くれにさへわたると也

88 廿一日八橋を出て行にいとよくはれたり山本遠き原野を行ひるつかた

になりて紅葉いと多き山にむかひてゆくかせにつ^は昔なき所くくち葉にそめかへてけり(二三ウ)(二二二・8) とり残たるをつれなきといへり

89 常磐木とも立交りて青地の錦を見るこ、ちす人にとへは宮ちの山といふ(二二二・2) 青地の錦よきたとへ也さながら見るやうの詞也宮路山は三

河国の名所也古哥多し

90 時雨けりそむるちしほのはては又 もみちのにしき色かへるまで(二二二・5) 時雨にひたと染て千しほになりたる也夫を紅葉の錦とみたて又その錦の色かへるほど色かこかる、と也時雨けり五文字かん用也時雨けりくくなり

91 待けりなむかしもこゑし宮路山 おなし時雨のめぐりあふ世を(二二二・8) めくるは時雨のゑん也是も一句のうた也五句迄いひつめて待けりな

と五文字へかへる也此日記に此体のうたのみあまたよみ給へりし哥の心聞へたる

ま、也昔と今と思ひやりし所也

92 山のすそ野に竹のある所にかや屋のひとつみゆるいかにして何のたよりにかくてすむらんと見る(二四オ)(二二二・10) 心なき所に心付てい

へる哀ふかし暮^はかし哥人はかくこそあるへけれ

93 ぬしやたれ山のすそ野に宿しめて あたりさひしき竹のひとつら (一

二三・3) ゆくてにみゆる所をさしつけてよむ哥也まことに見るてい也前書

をよくうけて此哥をよくみればなをかんあり手の付られぬ物也 (里竹 為氏卿

玉葉へたかりの家居なるらんかた山の麓にめくる竹の一むら この風情也

94 日は入はて、猶もの、あやめもわかぬほとにわたうとかやいふ所に

と、まりぬ (一二三・5) もの、あやめはあやもみへぬ也猶古今集恋の巻

頭へ子規なくやさ月のあやめ草の哥の注にくわしわたうといふ所書写の誤か知

かたし勅撰名所にもみへす哥によまぬ名所も道の記なればかくもあるへし

95 廿二日晝夜ふかき有明の影に出て行いつよりも物かなし 住わひて月

のみやこを出しかと うき身はなれぬ有明のかけ (二二三・7) 月の

みやこは月宮殿也爰の心は只都をさしていへり十六日に都を出給へれば月の都面

白き也 (一四ウ) 住わひて都を出たれ共長旅なればうき身はなれぬと也か、るう

たへをなさんと思ふ故に住侘て都を出たると也

96 とぞ思ひつゝくる (一二四・1) 前へつけてみるへし

97 供なる人有明の月さへ笠きたりといふを聞て 旅人のおなし道にや出

ぬらん かさうちきたる有明の月 (一二四・1) 旅する人は笠をきる故

に旅人にもあらぬ有明の月さへ笠きたりと也然は上の句旅人と同しやうに笠きた

る月かと也旅人の普のをかさと古哥にもあり

98 高しの山もこへつ (一二四・5) 三河国の名所也

99 海みゆる程いと面白し浦風あれて松のひ、きすこく波いと高し わか

ためやなみもたかしの濱ならん 袖のみなどのなみはやすまで (一二二

四・5) 袖の涙に舟のよる程なれば袖のみなど、いふ也伊勢物語に袖の涙の

さはく哉と讀し同じ心也爰はかくうき旅にぬる、袖は我ために波も高しの濱とい

ふかと也此哥に波も高し涙は休までとふたつありかやうにきたるは又一体なる

へし上の句波は海の浪下 (一五才) の句の波は袖の涙とみるへし

100 いと白き洲崎に黒き鳥のむれ居たるは鴉といふ鳥なりけり しらはま

にすみの色なる鳴つ鳥 筆もをよは、糸にかきてまし (一二四・10)

鳴つ鳥は鴉をいふ也白濱に鴉の黒くむらかる体を絵に書ても見たけれ共中々筆に

も及ふましきと也是も玉葉旅の部に入り調書に (あつまへまかりける道にて

はまにうの多くむれ居たるけし面白くみへければと有

101 はまなのはしよりみわたせは (一二五・4) 遠江名所也哥多し

102 鷗といふ鳥いと多く飛ちかひて水の底へも入岩の上にもいたり かも

めいるす崎のいはもよそならず なみのかけこす袖にみなれて (一二

五・4) 心明らか也旅行の様也みるものことに身のうへをいへり哥の心は我

袖の涙のみみなれて洲崎の岩もよそにはおもはずた、我袖のやう也なみのかけこ

すなと上手の風哥也 (一二五ウ)

103 こよひはひきまのすくといふ處にと、まる此處のおほかたの名は濱ま

つとそいひし (一二五・9) おほかたは十のとの七八といふ心也

104 住こし人の佛も拵まゝ思ひ出られて (一二六・1) 此濱松に住し

阿仏の親類なるへしなく成て後とそ聞ゆ

105 又めぐりあひてみつる命の程も返すゝ哀也 (一二六・3) 又めぐ

り逢てとは爰に住し人の子かまこと成へし次の詞にそのよに見し人の子むまこ

なとよひ出してとあり

106 はま松のかはらぬ陰をたつねきて みし人なみにむかしをそとふ (一

二六・五) 心あらは也松は千とせふれともかわらぬ故也見し人の昔を松にたつぬると也なみとははまのえんにてみし人なきにと也

107 そのよにみし人の子むまこなど呼出してあひしらふ(一二六・七)

此あいらふは愛の心也又あいさつの心にも聞へたり但愛する心かまさりたり

(一六オ)

108 廿三日天龍のわたりといふ舟にのるに西行か昔も思ひ出られていと心

ほそし(一二六・八) 西行鎌倉へ下りし事東鑑にもあり此川の舟に乗て武

士にうたれたる事みへたり

109 くみあわせたる舟た、ひとつにておほくの人のゆき、にさしかへるひ

まもなし 水の泡のうき世をわたるほどをみよ はやせのを舟さほもや

すめす(一二六・10) うきよを夢幻泡影にたとへたりそのきへやすき水の

泡のうき世をわたる是人間の習ひ也品こそ替れ安くて過る人はなしと観念したる

哥也是此日記におめておもしろき哥也三の句のほどをみよ餘情おもしろき也

110 こよひはとほつあふみ見つけの里といふ處にと、まる里あれどものお

そろしかたはらに水の井あり 誰かきてみつけの里ときくからに い

と、たひねそ空おそろしき(一二七・4) 心明らか也哥に水の

井の心はなし文章の餘情也いせ物語の廿四段にし水のある處に臥にけりと書る筆

法也是もものかたりのよせい也

111 廿四日ひるになりてさやの中山こゆ(一二七・9) 遠江の名所也詞

にいふ時はさやの中山といふにや哥にはよるの心をよむ時おふかたさよの中山と

みゆよるの心なき時は東ちのさやの中山なか／＼になど、古今集にもありおほむ

ねは此おもむき也但哥にもよるへきにや

112 ことのま、とかやいふやしろのほと紅葉いとおもしろく山陰にてあら

しもおよはぬなめり(一二七・9) やま陰故にあらしもさはらぬ也

113 ふかく入ま、にをちこちの峯つ、きこと山ににす心ほそく哀也(一二

八・1) さやの中山の景氣四季ともかくのことし

114 こゑくらすふもとの里のゆふやみに 松かせをくるさ夜の中山(一二

八・4) 時のけいきあり／＼としてすこく哀なる哥也かやうの哥は手をつけ

ていか、也只その折ふしをかんかんする所和哥のうるはしき色也ひと通り面白

うた也(一七オ)

115 あかつきおきてみれば月も出にけり 雲か、るさやの中山こへぬとは

みやこにつけよ有明の月(一二八・6) 是又けいき身にしみて前の哥の

ことしみやこに告よといふ此哥のかん也何ともいはすして唯この旅行の体を都に

告よとよせいあるもの也

116 川をといとすこし(一二八・9) 菊川也眺おきてみれば月も出にけりと

いふことはをうけて也

117 わたらんと思ひやかけしあつま路に ありとはかりはきく川の水(一

二八・10) 是又心あらは也東路に菊川といふ所はありとは聞しかとわたらん

とは思ひかけさりしに思ひの外なる事によりてわたり行と也かくいひすて、しか

も我身のうへの事を何とも断はせずして上品の姿也

118 廿五日きく川を出てけふは大井川といふ川をわたる水いとあせてき、

しにはたかひてわつらひなし(一二九・2) 河原はいく里とかやいとほるか也

水の出たらんおも影をしかる、(一二九・2) いく里は幾里也此河原

の間何里とかや有といふ心也又いく里とは石の名也詞はいく里といふて心は石を

ふくむなるへし水の出たらんおも影などもみるやうの詞也次の哥にいくせのい
しとよめれはいく里に石の心もあるへし

119 おもひ出るみやこの事は大井川 いく瀬のいしのかすもおよはし(一

二九・七) ありのまゝに聞へたり何につけても古郷を思ふこれ旅の習ひ也

120 うつの山こゆる程にしもあさりの見知たる山臥行逢たり(一二九・

9) あさりは阿仏の子也

121 夢にも人をなと昔をわざとまなひたらん心地して(一二九・10) 此

詞いせ物語の事也その詞に爲かえてはしけりすゝなるめをみる事とおもふに
すきやう者にあひたりかゝる道はいかてかいまするといふをみればみし人けり
とあり

122 いとめつらかにおかしくも哀にもやさしくも覚ゆ(一八〇)(一三〇・

1) おかしくもとは昔の業平のことくにうつの山にて山臥に逢たるは誠に昔
に似たるを思へは面白くも哀にも覚ゆると也昔と今と約束したるやうに山臥の知
たる人に逢はやさしきと也

123 いそく道也といへは又もあまたはえか、すた、やんかたなき所ひとつ

にそをとつれ聞ゆる(一二三〇・3) 女院におはする息女のかたひと所にや

此息女は為家卿のむすめ八十五 後堀川院の民部卿の典侍かこの人哥人也

124 わか心うつ、ともなしうつのやま 夢路もとをきみやここふとて(一

三〇・6) 物語の哥のうつの山邊のうつ、にも夢にも人にといふ哥より出た
る也哥の心はうつの山といへとうつ、ともはるけき旅に出てみやこを恋しう思ひ
ねに夢さへ遠く成行と也されは我心うつ、ともなしといへり

125 つたかえて時雨ぬひまもうつの山 なみたに袖の色そこかる、(一二三

〇・8) 我涙にて袖の色のこかる、故爲楓に時雨ぬひまもうきをうつの山と

かねたり是も物語に爲楓は茂りもの心細くといふ詞を取て也前の哥は業平の哥を
取この哥には物語の詞を取てみやこへ上る人を持てて文をした、めて筆のゆくに
任せてか、れしなるへしかやうの哥にて作者の程をも知へき也常に心を和哥にを
かすは成かたき事成へし(一八ウ)

126 こよひは手こしといふ處に留る何かしの僧正とかやのほりしとていと

人しけし(一二三〇・10) 此何かしとはかくれなき人をもいふ又何とやらん
名といふ僧正とみてもよし 源氏物語にては若紫巻に何かしの寺とあるはかくれ
なき寺といふ心也鞍馬をいふ也又夕顔の巻に何かしの院とあるは六條河原院をい
ふ也是も融大臣の住給ふ所なれば名高く隠れなき心にもちゆる也

127 やとりかねたりつれとさすかに人のなき宿もありけり(一二三一・2)

手越里に僧正泊りし故人つとひてさるへき宿もなかりしか又はしく人のなき
所も有てとまりしとなり

128 廿六日はらしな川とかやわたりて興津の濱に打いつ(一二三一・3)

駿河のおきつ也今の清見寺なるへし

129 なくく出し跡の月影など先思ひ出らる(一二三一・4) 都を十六日

の暁出給へる時の月影也

130 ひる立入たる所にあやしきつけのを枕あり(一二三一・5) 柘植の小

枕也くしにもする物なれば柘植のをくしと哥にもよむ也

131 いとくるしければうち臥たるに硯もみゆれば枕のしや(一九ウ)うしに

ふしなから書つけつ なをさりに見るめはかりをかり枕 むすひおきつ
と人にかたるな(一二三一・6) なをさりととは心にもかけず假初に只みる斗

にしたる枕なるほどに契を結ひたるとはし人にかたるなど也前に興津の濱とある
故に契り興津と也みるめはかりえんの詞也人のみるめにそへたり五句すらく滯
なく学ふとも人の及ふましきすかた也

132 暮か、る程清見か関を過る岩こす波の白き衣を打きするやうにみゆる
いとおかし(二三二・一) 清見関駿河にあり古哥多しこの関といふは今思
ふに此岩に波か、るを俗に親しらす子しらすといふ爰に昔は関をすへたりと見へ
たり興津といふは今の清見寺の里をいへは関は親しらすの所をいふへし此所荒海
故常に波高く立て岩に衣をかけたるに似たり

133 きよみかたとしふるいわにこと、はむ なみのぬれきぬいくかさねき
つ(二三二・三) ありくと見てい也手をつけていわんやうなし

134 程なく暮てそのわたりのうみちかき里にと、まりぬ(一九ウ)浦人のし
わさにやとなりよりくゆりか、るけふりいとむつかしきにはひなればよ
るの宿なまくさしといひける人のこと葉も思ひ出らる(二三二・五)

よるの宿なまくさしとは鴨長明かある家にやとりたればあみ釣なといとなむ磯物
のすみかにやよるのやとりかことにしてと長明の海道の記に書りその事なるへし
135 夜もすから風いとあれて波た、枕のうへに立さはく ならばすよそ
に聞こし清見潟 あらいそ波のか、る寝さめは(二三二・九) 尤哀な
る様也哥の心しるす事なし是も一句の哥也か、るね覚はならばすよすかたゆう
にして及ふましきもの也

136 富士の山をみればけふりもた、す(二三三・三) 煙もた、すの詞種々
の心あり不立の心にや古今の序にも今はふしの山のけふりもた、すなりとあり此
不立の詞に不立不断の両儀ありとなん古今集におゐて口傳ある事にや次の詞に富

士の煙の末も朝夕たしかにみへしものをいつの年より又此煙の事二條冷泉の(二
〇オ)かはりありと諸抄にもしるされたり先二條家には不断の説をもちひ來れる
にや冷泉家には不立の事にして用ひられしとかや冷泉為廣卿などのうたに不立の
心によみ給へる哥もある也爰は夫にはよるへからす古今傳授の事なれば手をつけ
てもよしなくや先あらましをいへるもの也

137 昔父の朝臣にさそはれていかななるみの浦なればなとよみし(二三
三・三) 阿仏の昔よみ給へる二三の句成へし此いかななるみの哥撰集に入か
重ねて考ふへし

138 とつあふみの国まではみしかは富士煙の朝夕儘にみへし物をいつの
年よりか絶しととへは定かに答ふる人たになし たかかたになひき果て
かふしのねの けふりのすゑの見へすなるらん(二三三・五) 富士煙
はかくや姫の古事より恋によせあれば其下心にてたか方に靡きたるそと也

139 古今の序のことはまて思ひ出られて(二三四・一) 古今の序に高き
山もふもとの塵ひちよりなりぬとあること葉也

140 一つの世のふもとのちりか富士のねを(二〇ウ) 雪さへたかき山と
なしけん(二三四・二) 歌の心とく事なし麓の塵といふ事は(千里行) 始
足下、高山起於微塵といへり

141 ち果しなからのほしをつくらはや ふしの煙もた、すなりなは(一
三四・四) 是も古今の序になからのほしもつくる也とある所也(皇代記に書弘
治三年三月造、長柄橋と有此儀にも子細有右三首の歌皆以古今の口傳也又家々の
意義もまちく也尽ると造るとの両儀也富士のけふりも不立と不断のふたつ也

142 こよひは浪の上といふ所に宿りてあれたる音さらにもあはず(二三

四・6) 波のうへ所の名也名所にはあらず今の由井かん原の邊なるへし

143 廿七日明はなれて後富士川を渡るあさ川いとさむしかそふれは十五瀬をそ渡りぬる さえわひぬ雪よりおろす富士川の 川かせこほる冬のころも手(二二オ)(一三四・7) 衣てとして冬の旅人の様みる体の歌也朝けのけしきさも覚ぬへし

144 けふは日いとら、かにて田子の浦にうち出蟹共の漁するをみても心からおりたつ田子のあまころも ほさぬうらみと人にかたるな(二三五・2) 田子とは田夫也(源氏にみやす所のうたに)へ袖ぬる、恋ちとかつは知なからおりたつ田子のみつからそうき是を取て世哥の心は田子の蟹とは阿仏の身をさして世尼を蟹によせてほさぬうらみと我心からするほとにと也

145 とそいはまほしき伊豆の府といふ處にと、まるいまた夕日残る程に三嶋の明神へ参る迎よみて奉る あはれとやみしまの神の宮はしら た、爰にしもめぐりにけり(二三五・6) 哀と神もみ給へと世爰にめぐりきたるを宮柱にそへていへり

146 をのつからつたへし跡もあるものを(二二ウ) 神は知るらむ敷嶋のみち(一二三六・1) 神は正直の頭に宿り給へは我家に代々傳りし敷嶋の道は人は何共いへ神はしろしめさんと也二神の昔より此道ははしまりし程にと也

147 たつねきて我こへかゝるはこねちを やまのかひあるしるへとそ思ふ(一二三六・3) 山の峽と心ふたつにかよはして也

148 廿八日伊豆のかうを出て箱根ちにかゝるいまた夜ふかかりければ玉くしけ箱根の山をいそけとも なを明かたきよこ雲のそら(一二三六・5) 王櫛笥は箱といはん枕詞也明かたきも箱のえん也前書によふかかりけれ

はとあり猶明かたき夜とうけて横雲にかねたり

149 あしからの山は道遠しとて箱根路にかゝる也けり ゆかしさにそなたの雲をそはたて、よそになしぬるあしからの山(二二オ)(一二三六・9) 足柄越迎古道也此山難所なれば中頃より今の箱根路を行と聞へたり哥は聞へたるま、也そはたててあしとつ、けたり雲にへたて、みへぬはゆかしきと也

150 いとさかしき山を下る人の足も留りかたしゆさかといふなるからうして越はてたれば麓に早川といふ川有誠にはやし(二三七・3) ゆ坂は今の湯本の坂をいふにや此坂のふもとに今も早川流たりからうしては辛勞してこゆる也こへ果たれと、をさへて麓に早川といふ詞との字にて聞へかたきやう也然共此詞はこへはてたれば今宵留る所あるやと思ふに麓に早川といふ川ありと也との字にて言のへたる詞也此との字は没前生後の詞とて前の詞をとの字にておさへて又言出す故にまへを没してしりへに生すといふ心也

151 木の多く流る、をいかにととへは蟹のもしほ木をうらへ出さんとてなかつ也といふ 東路のゆさかをこへてみわたせは 塩木なかる、早川のすゑ(一二三七・6) さなからみやりたる体也異本に水とあり水といふ心よりすゑといふ心まされるにや上句にみわたせはとあれは末といふ心か面白き歟

152 湯坂よりうらに出て日暮かゝるに猶とまるへき所とをし(二三ウ)(一二三八・1) 此猶といふ字に心を付へし前のからうしてこへはてたれとこのとの字爰の猶といふ字にて弥よく聞へたりからうして漸越果てたるに又麓にはや川迎あるを過て又浦に出ても猶とまるへき所遠しとみるへき也源氏後にかやふのたくひ多し

153 伊豆の大嶋まで見たたさるうみつらをいつことかいふととへは知たる

人もなし蟹の家のみそある 蟹のすむその浦の名もしら波の よするな
きさにやとやからまし まりこ川といふ川をいとくらくてたどりわたる
今宵はさ川といふ所にと、まるあすは鎌倉へ入へしといふ也 廿九日さ
川を出て濱ちをはるく〜と行明はなる、うみつらをいとほそき月出たり
うら路ゆく心ほそさを波まより いて、しらする有明の月(二三オ)
(一三八・2) 心細さをといえる也けいきこもりて有明の月と言のはしたる
面白き也

154 渚に寄かへる波の上に霧立てあまたありつる釣舟見へすなりぬ(二三
九・5) うたならて面白きことは也

155 蟹小ふね漕行かたをみせしとや なみにたちそふうらの朝霧(二三
九・7) 朝氣の景氣見るやうの哥也波に立そふてたにみへぬに霧さへ立ふた
かりて漕行かたのみへぬと也霧と波にもたせて也

156 都とをくへた、りぬるも猶ゆめの心地して たちはなれよもうき波は
かけもせし むかしの人のおなし世ならは(二三九・9) 為家卿と同
し世ならは何しに立はなれ袖に波をはかけましきを思ひの外也となり(二三ウ)

【鎌倉滞在の記】

157 あつまにて住所は月影のやつとそいふなるうら近き山もとにて風いと
あらし山寺のかたはらなれば長閑にすくて浪の音松風たえず(一四
〇・2) 浦近き所成は風荒く浪の音たへす山寺のあたりなれば長閑に寂しく
て又浪の音松風もたへすしてすこきと也

158 都のをとつれはいつしか覚東なき程にしもうつつの山にて行途たりし山
伏のたよりによりことつけ申たりし人の御もとより(一四〇・5) 女
院にさふらひ給ふ息女なるへし

159 たしかなる便につけて有し御返事と覚しくて(一四〇・8) 有し御
返しとは宇津山よりの歌の返哥也

160 旅衣なみたをそへてうつつの山 しくれぬひまもさそしくらん(二四
オ)(二四一・1) 前にうつつの山にて葛楓しくれぬひまもうつつの山とある哥
の返し也心は旅はさなうてもうきものを涙をそへてうかるらんしくれぬとてもさ
こそ也

161 ゆくりなくあくかれ出しさいよひの 月やおくれぬかたみなるへき
(二四一・3) 是も前にゆくりなくさいよふ月にさそはれてと有詞を取出て
月をかたみに見ると也

162 都を出し事は神な月十六日なりしかはいさよふ月をおほしめしわすれ
さりけるにやいとやさしく哀にてた、此返事斗をそ又きこゆ めくりあ
ふ末をそたのむゆくりなく そらにうかれしいさよひの月(一四一・
5) をくれぬかたみとの給ふ程にめぐり途末を頼むと也めぐり途は月のえん
也 へわするなよ程は雲ぬに成ぬとも空行月のめぐりあふまで此哥の佛也かくは
よみ給へれと終に鎌倉にて死去也さる程に此末をそ頼むとあることに哀也あまた
の人くを都に置いて鎌倉にてはて給へる死のえん誠にふかし

163 前右兵衛督為教の御娘歌よむ人にて勅撰にも(二四ウ)たひく入給
へり大宮院権中納言ときこゆる人(一四二・1) 為教は為家の子為氏卿
の弟也阿仏の為には別腹也権中納言は為教の息女大宮院は八十八代 後深草院の

御母也中宮藤原の姫子ヨシコの御事西園寺大政大臣実氏公の娘也

164 歌の事ゆへ朝夕申しなれしかはにや (一四二・三) 歌の友也その故にをとり給ふと也

165 道のほとのおほつかなさなと音信給へる文に はるくと思ひこそやれ旅ころも 涙しくる、袖やいかにと 返しに 思ひやれ露も時雨もひとつにて 山ちわけし袖のしづくを (一四二・四) 山路分こしにて露も時雨もひとつにあらそひ兼て袖の平となりたると也

166 このせうとの為兼の君も同じさまに覚束な (二五才) さなとかきて (一四三・一) 権中納言の兄か為兼は為教の一男也此為兼冷泉家ツギの元祖也後に毘沙門堂の大納言といふ

167 ふるさとは時雨に立したひころも 雪にやいと、さへまさるらむ (一四三・三) 時雨にたちしは衣のえん也時雨に濡て下り給ひし旅衣今は雪にさへ増らんと也

168 返し たひ衣うら風さえて神な月 しくる、空に雪を降そふ (一四三・五) 阿仏の住給へる月影の谷は浦近き所也と前に有此哥浦風は衣のえん也しくる、空に又雪の降て袖のさへまさるを思ひやり給へと也

169 式乾門院シカの御匣殿ミツときこゆるは久我の太政大臣のみむすめ是も續後撰よりうちつ、き二度三度のうちき、にも歌あまた入給へる人なれば御名もかくれなくこそ (二五ウ) (一四三・八) 式乾門院は後高倉院の皇女利子也八十五代 後堀川院の御妹也御母は北白川殿と申也みくしげ殿は哥人也へ過にける昔も今のつらさにてうき思ひ出にぬる、袖哉 へ身を更に同しうき世と思はずはいはほの中をたつね見てましなと秀哥よみし人也

170 今は安嘉門院におほんかたとてさふらひ給ふ (一四四・二) 安嘉門院は後マ高倉院の皇女邦子也式乾門院の御妹御母も同じ阿仏は此皇后に仕へし人也四條といへり始は右衛門佐といひし女房也撰集にも右衛門佐と入し也後の集共には四條と入たり

171 あつまち思ひたちしはあすとて (一四四・三) あすにて句を切てよむへし

172 まかり申しによしに北白川殿へまかりしかと (一四四・四) まかりまうしは暇乞也白川殿へ阿仏參給へると也北白川殿は多古右大臣公能の娘近衛院の後也

173 見へさせ給はさりしかは今宵斗のいてたちものさはかしくてかくとたに聞えあへすいそき出しにも心にかゝりておとつれきこゆ (一四四・五) 都にて逢給はさりし事心にかゝる故におとつれきこゆと也

174 草の枕なからとしさへくれぬる心ほそき雪ユキのひまなさなとかきあつめて (二六才) (一四四・九) 草の枕は旅也たひは萬自由ならねは野にふし山に臥草を引結ひて枕にもする故に草の枕とは旅になる也たひさへうきに都をは馴マてとしさへ暮て心細きにひまなく雪はふるとかき集てつかはすと也かきあつても雪のえん也

175 きへかへりなかわる空もかきくれて ほとは雲もそ雪になりゆく (一四五・一) 五文字せつ也なかわる空とは都の空也かきくらしてなかわれはいと、程遠く覚ゆるに雪さへ降てきへかへると也きへかへるは雪のえんなからきへかへり也程は雲もはるかなるたとへ也

176 など聞へたりしを立かへり其御返事 (一四五・三) 立返りとはその

ま、返り事有也

177 たよりあらはと心かけまいらせつるを(一四五・4) 是よりみくし

け殿の文の詞也

178 けふしはすの廿二日御文待えて珍らしくうれしさ先何事もこまやかに

申たく侍ふに今宵は御かた、かへの行幸の御うへとてまきる、程にて思

ふ斗もいか、とほいなうこそ(二六ウ)(一四五・5) 方たかへは方角の

ふたかりをいませ給ひて他所へ行幸あるをいふ源氏ものかたりにあまた出たり

179 御たひあすとておんまいり有ける日しも峯殿へ紅葉見にとて(一四

五・9) 前撰政岡白通家公ヲ光明峰寺殿といふ依之峯殿ともいふ後堀河院関

白也

180 わかき人くさそひ侍ひし程に後にそかゝる事とも聞え侍ひしかなと

やかく共御たつね侍らはさりし(一四六・1) 是迄みくしけ殿の文の詞

也などやかく共御尋とは峯殿へ何逆すくに御尋なかりしそと也

181 ひとかたに袖やぬれましたひ衣 たつ日をさかぬうらみなりせは(一

四六・4) 立日をさかぬうらみ皆旅衣のえんの詞也たつ日をしらぬうらみを

思へはひとかたに袖のぬる、はことほり也とこんはうしてよむ哥也新古今離別

よみ人しらすへきならせと思ひしものをたひ衣たつ日をしらすなりにける哉 此

おもかけあり

182 扱も夫より雪に成行とをしはかりおほん返り事は かきくらし雪降空

のなかめにも(二七オ) ほとは雪ぬの哀をそしる(一四六・6) 是

は前の阿仏のきへかへりの哥の返し也心は尤さうそ覺すらめこなたにも其哀をお

しはかりまいらすと也

183 とあれは(一四六・10) みくしけ殿の御返事にかくあれは也

184 このたひは又たつ日をしらぬとある御返りをそ聞ゆる 心からなにう

らむらんだひころも たつ日をたにもしらすかほにて(一四六・10)

御暇乞に参たれと對面し給はねはこなたよりこそ恨申へきにかへりて我を恨給ふ

か夫はそなたの御心からそと也

185 暁たより有と聞て夜もすから起居て都の文ともかく中に殊に隔なく哀

に頼みかはしたるあね君に(一四七・4) 阿仏のために姉成へし

186 おさなき人くの事共様々にかきやる程例の波風はけしく聞ゆれば只

今あるまゝの事をそ書付たる(二七ウ) 夜もすから涙も文もかきあへ

す 磯こす風にひとりおきゐて(一四七・7) 歌の様哀也月影谷浦近き

所なれはいそこす風といへり

187 又同じさまにて(一四八・2) あね君のかたへとおなじさまか

188 ふる里には恋忍ふおとうとのあまうへにも文奉るとて(一四八・2)

阿仏の妹成へし伊せ物語にもめのおとうともて侍りと書り

189 磯ものなどはしくもいさ、かつみあつめて(一四八・4) 磯物

は海苔の類也

190 いたつらにめかり塩やくすさひにも こひしやなれし里のあま人(一

四八・6) 此いたつらとはくうくとして也すさひとはなくさみ也詞に磯物

など、ある故にめかりといへり蠻人に尼をそへたり里のあまは阿波の国也塩やく

浦也

191 程へて此おと、いふたりの返り事いと哀にてみればあね君 玉つさを

見るに涙のかゝるかな(二八オ) 磯こす風はきく心地して(一四八・

8) 文を見るより先涙こぼる、と也磯越風はさなからこなたにも開心地する處なり

192 この姉君は中院中将ときこへし人のうへ也今は三位入道と申し世ながら遠さかり果て行ひぬたる人なり(一四九・2) 中院中将の室なりしか

離別せられしと也中将は三位にて入道せられしと也此姉君離別の後法心なるへし

193 其おとうとの君もめかりしほやくと有返り事様々に書付て人こふる涙のうみは都にも枕のしたにた、へてなとやさしく書て(一四九・5)

人をこふれば海もなき都にもとみるへし枕の下にた、てとは古哥に

194 もろともにもめかり塩やく浦ならば なかく袖になみはかけしを(一四九・9)

めかり塩やく浦ならば袖に波のか、るへしさりとも姉君ともろ共に

塩やかは中く袖に波をはかけましきにと也阿仏の姉妹いつれも哥人也(二八ウ)

195 此人も安嘉門院に侍ひし也つ、ましくする事ともを思ひつらねて書たるもいと哀にもおかし(二五〇・1)

つ、ましく何事にかあらん文の中の事なるへし

196 程なく年暮て春に成にけり霞籠たるなかめのたとくしき深谷の戸は

となりなれ共鶯の初音たにも音つれこす思ひ馴にし春の空は忍ひかたく昔の恋しき程にしも(二五〇・3)

馴し都の空は忍ふにも忍ひかたく昔の事思ひ出らる、事尤旅の空の妹思ひやるへし

197 又都の便り有と告たる人あれば例の所くへの文書中にいさよふ月とをどつれ給ひし人の御もとへ(二五〇・8)

是はゆくりなくあくかれ出しの哥讀し女院に侍らひ給ふ阿仏の息女也

198 おほなる月のみやこの空なから(二九オ) また聞さりしなみのよるく(二五一・2)

臘成月はあつまも都も替らぬに替りたる物は波の寄

を驚也よるくに夜をそへていへり

199 などそこはかとなき事共をかき聞へたりしを(二五一・4)

そこはかはそこともなき也はかに心なしなとにて句を切てよむへし前の哥に付たる詞也

200 たしか成處より傳りて御返事をいたう程もへす見奉る ねられしな都の月を身にそへて

なれぬ枕のなみのよるく(二五一・5)

息女の返哥也馴ぬ蟻の旅枕に波のよるく聞給は、中くねられしと也身にそへて馴ぬ

枕うつくしきすかた也

201 権中納言の君はまきる、事なく哥をよみ給ふ人なれば(二五一・10)

権中納言の君大宮のいんの女房也前に涙しくる、の哥あり

202 此程手習にしをきたる哥とも書集て奉るうみ近き所なれとかひなと拾

ふおりもなくさのはまならねはおなき心地してなとかきて(二九ウ)

(二五二・1) 折もなくと言かけたりなくさの濱はきみの國の名所もおなき

はおもなき也

203 いかにしてしはし都をわすれかひ なみのひまなくわれそくたくる

(二五二・6) 浪の寄かへるひまのなきやに都の事を思へは何として都の事

をわすれんそと也わすれをわすれ貝とかねわる、に我をかねたり

204 しらさりし浦山風も梅か香は みやこに似たる春の明ほの(二五二・8)

しらぬうら風のさそひ來る梅香も又春の曙も都に似たると也

205 花くもりなかくてわたるうら風に かすみた、よふ春の夜の月(二五二・10)

花の咲頃空の曇たるを花曇といへりた、よふ中に春の月の朧にみへ

たる景気えんなる姿也霞た、よふ此哥の作也た、よふは風になひく心也そのひま
く春の月の朧くとみゆるてい感情かきりなき也

206 あつま路の磯山かせのたへまより なみさへ花のおもかけにたつ(三
〇オ)(一五三・二) 心明也波さへ花秀哥の体也是も都の春を思ひやりて也

207 都人思ひもいてはあつま路の はなやいかにとをとつれてまし(一五
三・四) 都人我を思ひ給は、東の花はいか、と音信給はれ我はみやこの花の
恋しきにと也以上五首いづれもすらくとしてやさしく哀に面白くしかも心ふか
く姿うつくし

208 なとた、筆に任せて思ふ儘にいそきたる便とて書さすやうなりしを
(一五三・六) 思ふ儘にて句を切てよむへし思ふ儘の詞をうへ、つけてみる

へき也思ふま、に筆に任せてと返してみるへし

209 程もへす返事し給へり日頃のおほつかなさも此おんふみに霞はれぬる

心地してなとあり(一五三・八) 日頃より文の詞也

210 たのむそよしほひに拾ふうつせ貝 かひあるなみのたちかへるよを
(一五四・一) 前のいかにしての哥の返し也阿仏の哥にしはし都をわすれ貝

とあるをうつせ貝をよみて返す也かひある波は阿仏をさして也此哥の望叶ひて都
へ上り給はん事を頼むそよと也

211 くらへ見よ霞のうちの春の月(三〇ウ) はれぬ心はおなしなかめを
(一五四・三) 花母の哥の返し也こなたにも霞のうちの春の月にはれぬ心は

同し事と也くらへてみ給は、同しなかめとは知せ給はん程にと也

212 しら波の色もひとつに散花を 思ひやるさへおもかけにたつ(一五
四・五) 東路の哥の返し也哥の心は浪も花も色はひとつにしろし其花の散を

都にて思ひやるさへ佛に立程にと也此さへの字にてよせい面白しこそあるらん
といふ心をこのさへにてふめり

213 東路のさくらをみてもわすれすは みやこの花を人やとはまし(一二五
四・七) 都人の哥の返し也心明らか也いづれのほんにも返哥四首あり此ま、

か但一首書おとしたるかなるへし古き本に書おとしたるを後にうつしもてきたる
にや

214 やよひの末つかたわなくしきわらはやみに日ませにおこる事二度に
成ぬあやしうほれ果たる心ちしなから三たひに成ぬへきあかつきよりお

きみて仏のおまへにて心をひとつにして法花經をよみつ(三一オ)(一五
四・九) 心をひとつは一心不乱也かなに書時はほく経とかきてほけきやう
とよみくせ也源氏にくみんそくと書てけんそくとよむ也

215 そのしるしにやなこりもなくおちたる折しも(一二五・四) なこり
もなくはおこりのかけもなくの心也

216 都の便あれはかゝる事こそなと(一二五・五) おこりの事也

217 ふるさとへも告やるつめてに例の権中納言の御もとへ旅の空にてあや
うき程の心細さもさすかにたもつみのりのしるしにや(一二五・六)

けふ迄は影もなくなりたる也

218 いたつらに蟹のしほやくけふりとも たれかはみまし風にきへなは
(一二五六・一) 是は花山院の御哥に、旅の空夜はのけふりとのほりなは蟹

のもしほ火たくかやみんと遊せし御哥をもて思ひよれるとみゆ心は我なくなり
てけふりとなる共蟹の塩やくけふりかとも人のみるへきかさは見ましと也風にき
へなはとはけふりと我身とをかねたるもの也

219 と聞へたりしをおとろきて返り事とくし給へり(三二ウ) きへもせ

し和哥の浦ちにとしをへて ひかりをそふる螢のもしほ火(一五六・

3) 阿仏におとらぬ哥人成へし和哥の道に年へ給へる人なれば其しるしあり
て光を増給へは中く消給はしと也

220 おほん經のしるしいとたうとくて(一五六・7) 前に法花經をよみつ
とあり

221 たのもしな身にそふ友となりにけり 妙なる法の花のちきりは(一五
六・8) 妙法蓮花の仏のちかひは頼もしや身をはなたぬ友と成たるは有かた
きと也

222 う月の初つかた便あれは又おなし人のおんもとへこそ春夏の恋しさな
とかきて みし世こそかはらさるらめくれはてし 春よりなつにうつる

こすゑも(一五六・10) 前書にて聞へたり見し世こそかはらさるらめとは
阿仏の都にてのみし世也四季は三千世界に至るもの成はかはらしと也

223 夏ころもはや立かへてみやこ人(三三オ) 今やまつらん山ほと、き
す(一五七・5) 花の衣を立かへて也更衣の心也

224 そのかへり事又あり 草も木もこそ見しま、にかはらねと ありしに
もにぬこ、ちのみして(一五七・7) みし世こそその哥の返し也前の哥に
うつる也末もとあるをうけて草も木もこそにかはらねとかたらふ人のなければ有
しにもにぬ心ちすると也

225 さてほと、きすの御たつねこそ 人よりも心つくしてほと、きす
た、ふたこゑをけふそき、つる(一五七・10) 夏衣のかへし也今や待ら
んと尋給ふ我は人よりも心つくして二声を聞たると也ふた声は人よりも心をつく

したる故也といへり

226 実方の中将のさ月まで時鳥をきかてみちの国より 都には聞ふるすら
ん子規 関のこなたの身こそつらけれ とかや申されたる事の侍ふなる
其ためしと思ひ出られ(三二ウ)て此おほん文こそ殊にやさしくなと書
ておこせ給へり(一五八・3) 実方中将奥州させんの時なるへしこの哥後
撰集に入也

227 さる程に卯月の末に成にけれと郭公の初音ほのかにも思ひたへたり人
つてに聞はひきのやつといふ所にあまたの声なきけるを人き、たりなと
いふを聞て 忍ひねはひきのやつなるほど、きす 雲ゑに高くいつかな
のらむ(一五八・9) 心明也ひきのやつといひて雲ゑに高くといへるすら
くとしてたけある哥のさま也

228 などひとり思へ共其かひなしもとより東路はみちのおくまで昔より子
規まれなる習ひにや有けんひとすちに又なかつはよ生まれにも聞人あり
けるこそ人は聞けるかと心つくしにうらめしけれ又化徳門院の新(三三
オ)中納言と聞るは(一五九・6) くわこくみんと書たる本あり信なるへ
し紹運録にも拾芥などにもみへす化徳院は拾芥にあり新中納言女房の名也

229 京極中納言のみむすめ(一六〇・2) 定家卿の娘也

230 後深草の前の齋宮と聞へしに(一六〇・3) 此齋宮も紹運録にみへす
父の中納言の参らせおき給へるま、にてとしへ給ひにける此女院は齋
宮の御子にしたてまつり給へりしかはつたはりて待らひ給ふなるうき身
こかる、もかり舟なとよみ給へりし民部卿のすけのせうとにてそおわし
ける(一六〇・4) うき身こかる、もかり舟は後堀河院の民部卿の典侍の哥

231

232

233

234

235

の二三の句をいひ出せり後撰集に入たる哥也へにこり江にうき身こかる、もかり舟はてはゆき、のかけたにもみす 此哥の事也せうとにてそとはすけのためにあねなるへし

232 さる人の子にて (一六〇・9) 定家卿の子なれば也

233 あやしき哥よみて人に (三三ウ) はきかれしとあなちにつ、み給ひしかと (一六〇・10) あやしきとは爰にてはあしき也ところによりて心かはる古今の序に哥にあやしく妙也といへるはほめたる事也

234 はるか成旅の空の覚束なさに哀なる事共をかきつ、けて いか斗子を おもふ鶴のとひわかれ ならはぬたひの空に鳴らむ (一六一・1) 新

中納言の哥也心は家をつかせんと思ふために鎌倉に訴給ふは子を思ふか故也誠に面白き哥也 (夜の鶴の憶子籠中鳴この句よりいへり

235 と文の詞つ、けて哥のやうにもあらずかきなし給へるも人よりは等閑ならず覚ゆおほん返事は (一六一・6) 人よりはなおさりならずとは人々よりは心さしふかきと也

236 それ故にとひわかれてもあし田鶴の子をおもふかたは猶そかなしき (三四オ) (一六一・9) 夫故とは為家卿の家督の事故にとひ別れて也子を

思ふかたは仰の外にかなしき物そと也

237 ときこゆそのつゝゐてに故入道大納言草の枕にも立そひて (一六一・1) 為家卿也

238 夢にみへさせ給ふよしなど (一六一・2) 在鎌倉にてみる夢なれば旅の心にて草の枕にも立そひてと言ひ

239 此人斗や哀とも覚さんとて書付て奉る (一六一・3) この新中納言

は為家卿の連枝なればしたしきをもて哀とも覚さんと也

240 都までかたるも遠し思ひねに しのふ昔のゆめの名残を はかなしや たひねの夢にかよひきて さむれはみへぬひとのおもかけ (一六一・5) この二百心明也皆為家卿の事也哀ふかし

241 など書て奉りたりしを又あなちに使たつねて返事し給へりさしも忍ひ給へりしもおりからなりけり (三四ウ) (一六一・9) さしもより都

よりの文の詞也旅の枕になき人の通ひて夢に見へ給ふは折から哀也と也

242 東路の草の枕はとをけれと かたればちかきいにしへの夢 (一六三・2) 面白き贈答也都迄かたるは遠しとの給へ共いにしへの夢もかたれば近き心地すると也尤東路の草の枕は遠けれどもと也

243 いつくよりたひねの床にかよふらん おもひをきつる露をたつねて (一六三・4) 旅の夢に通ふと宣ふはいつくよりかはかよふそと也扱は昔思

ひ置つる事をたつねて通ふと也露といわんとて思ひおくといへり

244 などの給へり夏の程はあやしき迄音信もたへて覚束なさもひとかたならず (一六三・6) 此あやしきはふしんしたる心也覚束なさもとは心えなしと也

245 都の方は志賀の浦波たち (山) 三井寺のさはきと聞ゆるもいと覚束なし (一六三・8) 志賀の浦波たちと句をきりて山三井寺とよむ也志賀の浦波

は山三井寺のさはきといはんあや也 (三五オ) 山とは山門也山門と園城寺との諍論也是は弘安六年まいさんと三井寺と天王寺の別當を争ふ時の事也ひとかたなら

すとは爰の程音つれ絶たるに又山門の事きけはひとかたならずと也

246 からうして八月二日に便侍得て日頃よりをきたりける人々の文とも

取集てみつる(一六三・10) 日頃便有やと書置たる文共一度にかまくらへ

と、きてみると

247 侍従宰相の君のもとより五十首の和哥をよみたりけるとて清書もしあ

へす便すくさしとて下されたる哥もいとおとなしくなりけり(一六

四・2) 侍従宰相の君とはためすけ侍従は兼官にや

248 五十首に十八首に点あひぬるも(一六四・5) 合点十八首也

249 あやししく心のやみのひかめこそあるらめ(一六四・6) 此あやし

はよからぬ心也心のやみとは人の親の心はやみにあらね共此哥の心にて也夫故に

ひかみたる事あらんと卑下の詞也

250 その中に 心のみへたてすともたひ衣 山路かさなるをちのしら雲

〈三五ウ〉(一六四・7) 古哥に思ひやる心斗はさはらしをなにへたつら

ん峯のしら雲 此佛也心のみは心斗也たとへ心は隔てすとも旅衣重る山と衣のえ

んを受て夫さへあるに恨めしきはをちの白雲と也

251 とある哥をみるにたひの空を思ひをこせてよまれたるにこそ心をやり

て 哀なれは其哥のかたはらに文字ちひさく返事をそ添てやる 恋忍ふ

こゝろやたくふあさゆふに ゆきてはかへるをちのしら雲(一六四・

10) 恋忍ふ心は都も爰も同し事と也白雲を行かへるも心也思ひは同し思ひそ

と也

252 又おなしたひの題にて かりそめの草の枕のよなくを 思ひやるに

も袖ぞ露けき(一六五・6) 都より思ひやるさへ袖のぬる、程に草の枕の

よなくはいかにし給ふらんさこそ袖をぬらし給はんと也草の枕に袖のつゆうる

はしきもの也

253 とある所にも此返事をそ書そへたる(三六オ) 秋ふかき草の枕に我

そなく ふりすて、こし鈴虫の音を(一六五・9) ふり捨てはす、むし

のえん也人をふりすて、下りたれは今は草の枕に我立替りてなくと也

254 又此五十首のおくに言はをかきそおほかた歌のさまなとしりし付て

置に昔の人くのことを(一六六・2) 昔の人くとは定家卿為家卿な

と成へし

255 これを見はいかはかりとかおもひつる 人にかはりてねこそなかるれ

(一六六・5) 是を見はとは五十首の和哥の事也昔の人の是を見給は、いか

程嬉しく思ひ給はんと也おくれさきたつならひなれはなき人にかはりて我ひとり

ねになくと也哀ふかし

256 と書つく侍従のおとうと為守の君の許よりも二十首の哥を送りてこれ

に点あひわるからん事をこまかにしるしたへといはれたり(一六六・

7) 哥のてんさく也

257 ことしは十六そかし哥のくちなれやさしく覚ゆるも返すく(三六ウ)

心のやみかたはらいたくなん(一六六・10) 返すく後の返すすみ

てよむへし源氏にてもかくの如しかたはらかたわらとよむへし是かんなのよみく

せ也

258 是もたひの歌にはこなたを思ひてよみたりけりと見ゆくたりし程の日

記を(一六七・3) よみたりけりをよんたりけりとよむ也日記をにきとよみ

くせ也

259 此人くくのもとへ遣したりしをみてよまれたりけるなめり(一六七・

5) なんめりとよむへし

260 立別れふしのけふりを見ても猶 心ほそさのいかにそひけん 又是替

返しを書つく かりそめに立別ても子を思ふ 思ひをふしのけふりとも
見し(一六七・7) 子を思ふ思ひを火にもたせて思ひの高さをふしによそへ
ていへる也

261 又権中納言の君いとこまやかに文かきてくたり給し(三七オ)後は
(二六八・2) 是より文の詞也

262 歌よむ友もなくて秋になりてはいと、思ひこゆるまゝにひとり月を
ななめ明してなと書て あつま路のそらなつかしきかたみには 忍ふな
みたにくもる月かけ(二六八・3) なつかしきかたみには月より外になき
ものを夫さへ涙に盛て見へわかぬと是等を自問自答の哥といふへしわれにとふ
てわれに答ふる哥の体也忍ふ涙かくす心にあらす恋忍ふ心也

263 このおほん返し是もふるさとの恋しさなとてかきて かよふらしみや
この外の月みても そらなつかしきおなしななめは(二六八・8) 月
影谷にて見る月なれば都の外といふ也たとへ都の外の月にてもなつかしななめは
同じ事と也されは思ふ心はかよふらしと也扱此日記に頃は三冬たつはしめの空と
いふより書いたしてとしくれ春に成て又秋迄の事を書てふたとせにかけて四季の
うつりかはる所を見せて秋にて書果したる所見所あり

264 都の哥とも此後おほくつもりたり又かきつくへし(二六九・2) 書
續書付の二つ也かきつく清濁いつれも聞ゆる也鎌倉にての訴状を長哥にて述べら
れし

【長歌】

265 敷嶋や やまとの国は(二六九・4) 敷嶋日本惣名也大和国に敷嶋あ
り此しきしまは次の詞にやまと、いわん枕詞也(三七ウ)

266 あめつちの ひらけ初めし 昔より 岩戸を明て おもしろき(一六
九・4) 天岩戸也日神籠給ふ所也面白きは日神岩戸より出おほん顔の少し見
へ給ふ時面白と諸神のの給ひし詞也

267 神楽の言葉 うたひてし(二六九・6) 岩戸の外の神楽也神楽は是よ
り始るうたひてしとは神楽のうたひ物也梁塵秘抄にありへ三山には後降らし外山
なるまさきのかつら色付にけり 是今の世の神楽のうたひもの也此哥にふしを付
てうたふ事也此うたひ物に本末有猶かくらのうた品々有

268 されはかしこき ためしとて ひしりの御代の 道しるく(一六九・
7) 聖代の治りたる道は今にいちしるきと也聖代とはもろこしにては堯舜日
本にては延喜天曆の帝をさして言へき歟

269 人の心を 種として よろつのわざを(二六九・8) 古今にやまと
うたは人の心を種としてといへり萬とは万物をさしていふ也

270 言のはに をに神までも あはれとて(二六九・9) 古今序に目に
みへぬ鬼神をもあはれと思はせと有

271 八嶋の外の よつの海(二六九・10) 八嶋は日本也外とは三千世界を
さして也よつの海四海也

272 波も静かに おさまりて(二七〇・1) 国家安全なれば四海の浪も静
謐也

273 空吹風も やわらかに 枝もならさず ふる雨も 時さたまれば(一

七〇・一) 周公旦の時太平に治りて天も時代をかんして雨順風調とて五日(三

八才)の風十日の雨とて太平の時はよき程に雨か降風も静にて枝をならさぬ也

274 君々の イコトみかとのまゝに したかひて(一七〇・三) 君々たれば

臣々たるの詞にて書たり又イ本のみことまゝにと見る時はみことのりのまゝ也
いづれも心は同じ

275 わかの浦ちの もしほ草 かきあつめたる あと多し(一七〇・四)

續後撰平泰時の哥にていへりへかき置し和哥の浦ちのもしほ草いか成方に波のよ
すらん是を取出て申されたる所作意誠に奇妙也俊成定家為家卿代々書置れし筆の
跡ありと也書集たる跡多きにいかなる方に波のよすらんしり給へりやと也則北条
家の先祖泰時のうたを引出て申されしは奇明也アツ

276 それか中にも 名をとめて 三代までつきし 人の子の 親のとりわ

き ゆつりてし(一七〇・五) 先祖御堂関白道長公より代々の中に殊更和
哥の道通達せられしは俊成卿也然はそれか中にもとは俊成卿より定家卿為家卿の
三代をいへる歌然は爰の人の子とは為家卿にあたる也親のとは定家卿也

277 そのまことさへありながら(一七〇・七) 定家卿より為家へゆつりあ

たへられし證文成へし但人の子のといふ所を為家の子とみれば親のとりわきとい
ふは為家にあたる也

278 おもへはいやし 信濃なる そのほ、木、の そのほらに たねを蒔

たる とかとてや(一七〇・八) は、木、に母をもたせたりその原は信濃
の名所也母といひてそのはらとうけたり皆卑下の詞也(三八ウ)

279 世にもつかへよ いける(世の)(一七〇・10) 帝の奉公也

280 身をたすけよと 契りをく(一七一・1) 約束也

281 須磨とあかしの つゝきなる 細川山の 谷川に(一七一・1) 細

川の庄代々の知行所也播磨国と津国の界に有

282 わつかに命 かけひとて(一七一・3) 命をかくるを覚にもたせて谷

川に覚と受たる詞也

283 つたひし水の みなかみも(一七一・3) 覚より傳ひし水に代々を籠

たる也

284 せきとめられて 今はた、(一七一・4) 為氏卿に妨られしと也

285 くかにかかれる うをのこと(一七一・5) 水上をせきとめたれば陸

に上る魚の如くになると也

286 かちをたへたる 舟のこと よる方もなく わひはつる(一七一・

5) 梶なき舟なればよるかたなしと也ゆらの戸をわたる舟人の哥の心也

287 子を思ふとて よるの鶴 なくく都 出しかと(一七一・7) よ

るの鶴とは阿仏の身をたとへて也佗果る子とつけて子を思ふといふにより又おこ
して書出たりよるの鶴とは前にもしるしたり

288 身は数ならず かま倉の 世のまつりこと しけ、れと(一七一・

8) 時宗天下の政はしけく取おこなはるれと也

289 聞へあけてし 言のはも 枝にこもりてうめの花(三九オ)よとせの

春になりけり(一七一・9) 聞へ上てしは上聞に達する也言のはもとは
訴状也身の数ならぬは枝にこもりてはや四年に成たると也枝にこもりの言葉おも
しるき物也上聞に達せずして中にと、こほるを枝に籠りて梅の華といへり

290 行なもしらぬ なか空の(一七二・1) 此二句より文覆して書出す詞

也

291 風にまかする ふる里は 軒端もあれて さ、かにの いかさまにか

は なりぬらん (一七二・2) 軒端もあれてさ、かにの此二句古哥ある歟

いか様哥のやう也但詞定か録愈下向より早四年に成はふるさとはいかやうに成つ
らんと也

292 代々のあとある 玉つさも (一七二・4) 代々の證文也又これより^四
して番出す也

293 さてくちはては あしからの 道もすたれて いかならん (一七二・

5) あしからんといひかけてあしからの道とうけたり

294 これを思へは わたくしの なけきのみかは 世のためも つらきた

めしと なりぬへし (一七二・6) 政道を取うしなひ給は、私のなけきの

みかは天下のためにも万人の歎きならんと也

295 ゆくさきかけて さまゝに かき残されし 筆のあと (一七二・

8) 為家卿の書給へる證文なるへし

296 返すくも いつはりと 思はましかは ことほりを (三九ウ) た、

すの杜の ゆふしてに やよやいさ、か かけてとへ (一七二・9)

理をた、すは誓言也ゆふしてにかけてとうけたりやよやはやよ時鳥などのたくひ
也呼かけたる詞也いさ、かは少し也

297 みたりかはしき 末の代に あさはあとなく なりぬとか いさめ置

しを わすれすは (一七三・2) あさはあとなくは朝廷の政をさしていへ

り又麻也いさめ置しとは平泰時のうたにへ世の中にあさは跡なく成にけり心の
ま、のよもきのみして 此哥の事也 (新勅撰雜ノ二題不知平泰時とありかやうに

先祖の北条殿いさめ置給ふ程に我身のなけきを引直し給へと也哥の心はよもきは

おのつからためされともすく也然るに世の中の麻は跡なく絶てゆかめるよもきの
み心のま、に世ひろると也

298 故ある事を 又たれか 引なをすへき とはかりに 身をかへりみす

たのむそよ (一七三・4) かくの如く成はゆかめるものを引直し給へと也

299 その世をきけは さてもさは (一七三・6) 又^四して番り長哥のかく
は是よき手本也

300 残るよもきと かこちてし 人のなさけも か、りけり (一七三・

7) へ君ひとり跡なき麻の敷しらは残る蓬の敷をことほれ この哥の事也こ

しへの庄の哥也 (四〇オ)

301 同じしはりまの さかひとて ひとつなかれを くみしかは 野中のし

水 よとむとも もとの心に まかせつ、 (一七三・8) 古今よみ人

しらす へいにしへの野中のし水ぬるけれどもとの心をしる人そくむ 是にてい
へりよとむとは為氏卿の押領成へしものと心とは爰にては本領安堵の心也本哥の

取やう奇妙の作意也

302 と、こほりなき 水くきの あとさへあらは いと、しく (一七四・

1) 水くきは筆をいふあとさへとは為家卿の蹟状なるへし

303 鶴かをかへの 朝日影 八千代の光り さしそへて 明らけき世の

猶もさかへん (一七四・2) 政道殿重成は萬代榮給はんといふ事を明らけ

き世の猶も榮んと祝言にと、められし也

304 なか、れと朝ゆふいのるきみか代を やまとことにはにけふそのへつる

(一七四・5) 是を反哥といふかへし哥ともいふ長哥の次にならすある也

右是迄目安之趣也

【裏書】

305 残るよもきとかこちける所の裏書に（四〇ウ）皇太后宮大夫俊成卿の

御娘父の譲とてはりまの国こしへの庄といふ所を傳へしられけるを妨けて武蔵前司へことなるせせうにはあらて參らせられける歌は新勅撰にも入待るとやらん心の儘の蓬のみしてといふ御歌をかこちて申れけるうた君ひとり跡なき麻の数しらは 残る蓬のかすをことはれ とよまれければ評定にも及はず廿一條の地頭の非法をみなと、められけり其後野中のし水をすくとて わすられぬもとの心を知かほに 野中のし水影をたにみし とよまれたるもそのこしへの庄へくたられける時の哥也新勅撰に入て侍りし 永仁六年三月一日書之（一七四・七） 永仁は九十二代 伏見院の年号也（四一オ）

【仮名諷誦】

かなふしゆ

- 1 清き心の誠を出し一切の三宝に申事有（二・一） 清き心は清浄心也まことは真実也三宝とは仏法僧此詞此諷誦の序分也
- 2 先常なき世の習もとより空しき事と知なから（二・二） 此先の字施主の趣を言出ん発端也いてやなといふに同し心也
- 3 目のまへの別にたへぬかなしひ（二・四） 為家卿の別也たへぬは悲しさを堪忍えせぬなり
- 4 明ぬ夜半の夢路にたとる心地して過る月日も思ひ分ぬにいつ、の七日になり又ひと時のけふりとのほりし後（二・五） 五の七日は五七三十五

日をやわらけていふ也一時とは月日といふにたいして也

- 5 雨とやなりけん雲となけん（二・九） 此二句きへ安きたとへ是は唐巫山の神女の襄王に見へていひし詞にて書り其詞に（朝^ハ為^ハ行雲^ト夕^ニ、為^ハ行雨^ト、又もろこしに劉禹錫といふ人つまにおくれたる時に劉夢^ホ得^ホといふ人の送る時に（相逢^ホ相失^ホ、兩如夢^ホ為雲^ホ今不知此詞にて書り

- 6 た、つくくとおほそらをのみかこてもかよふ幻のことつ（四一ウ）てもなければ玉のありかをそこたにしらす（二・一〇） そことたにそこたにイ本に有是は長恨哥に玄宗帝貴妃を恋て魂魄のありかを尋給し事より起りて源氏桐壺の巻に 帝源氏の母更衣に別れ給ひて歎給ふ時此長恨哥の詞を思召出でへ尋行幻も説傳にても玉のありかをそこしるへく 是にて書れし也幻のことつとは幻といふ仙人玄宗に逢てさも覚さは貴妃の魂のありかを尋參らせんとて風に入雲に乗て三千世界を尋て日本の尾張國あつたに尋來りければ楊貴妃のみ給へるを逢て玄宗の歎をかたりければさらはかたみにとて玉のかんさしを幻に給はる夫を取てかへり玄宗に見せ奉りし古事也心は玄宗より起り詞は桐壺の帝の御哥より書れしもの也

- 7 いつれもよそふるかたは事かはれ共ひとつ思ひは同しかるへし（三・一三） よそふるかたとは源氏の尋行の哥の事又楊貴妃の事我思ひによそへていふ事はかはれとも別をかなしふ歎はいつれも同し事そと也
- 8 扱も此いまは昔に成ぬる人は（三・一五） 為家卿也
- 9 としは八とせのよはひにふたとせはかりや立さりける時五代の君に逢奉り（三・一六） （人皇八十五代 後堀河 四條 後嵯峨 後深草 龜山 是五代歟

10 家に傳ふる敷嶋の道は三代の撰者とそ聞へし(三・19) 後さかの院の續後撰同院續古今此二度の撰者也但二代の撰者を三代と書誤る歟

11 在世にも妙なる言葉を残し(三・21) 和哥の詞也

12 なき世にも(四二オ)かしき跡をと、むる(三・22) 在世にも對になき世にもといへりかしき跡とは先祖相傳の和哥通達の跡を千家にと、むる成へし

13 司はかけのなひくに近づき(三・23) 大臣をかけなひくといふ也為家卿の當官正二位大納言故に近づきといへり

14 位はおほきふたつの品にのほり(三・24) 正二位大納言のから名を並相といふも相に並とよむ也大臣につく官也

15 世をのかれ誠の道を尋ねて(三・25) 仏道也

16 ふたつもなくみつもなき一乘法華の行者にて(四・26) 為家卿出家して名を融覺といふふたつもなくみつとは法華經に(十方佛土中唯有一乘法無二亦無三矣

17 日ごとにとくしゆをつとむる事二百十部(四・27) 書物に向ひてよむを讀といふそらにとなるをは誦といふ也爰に二百十部と有は法花經の題目斗成へし

18 やまひのこのいまはのきはまても仏を念したる事つゝあにいつつか也(四・28) 今はのきはとは此世を去んとするいま也終に静とは臨終正念也

19 心をひとつにしてをはりみたれさりしかは(四・30) 一心不乱に臨終し給へりと也

20 さり共と華の臺に思ひをくりてもさらぬ別れの(四二ウ)あかぬ名残

はなをなくさむかたそなかりける(四・32) さらぬ別れはえさらぬ別れ死別をいふ也花の臺には蓮臺也為家卿成仏の義也されとも死別のかなしきになくさむかたはなきと也

21 とし頃はうと濱のうとかりしあたりなれと(四・35) うと濱駿河の名所也うときといふ枕詞也新勅撰恋部四(いつとなく恋するかなるうと濱のうとくも人になり増る哉 又新古今よみ人しらすへうと濱のうとくのみやは世をはへん波のよるく逢みてし哉 などあり

22 わかの浦ちの波のたよりは(四・36) 紀州和哥浦を哥道に寄ていへり

23 いかなるえにかひかれけん(四・37) えんにか也

24 古郷をものはなれしたしきをもすて、影のかたちにしたかふためしなれと(四・38) へ芦の屋の灘の塩やき暇なみつけのをくしもさ、すきにけり

25 臥猪の床のいをやすむる隙たになくて(四三オ)(五・41) へかるも

かき臥猪の床のいを休みねられめか、らすも哉 かつみ式部哥にあり

26 歌の道をたすけつかへし事はたとせあまりみとせはかりにもやなりに

けむ(五・42) 是迄阿仏の身の上を書れしにや為家卿逝去の後年月のうつる程也その間和哥の道をたすけ家の為に成し事共三年になると也

27 風に散しく華にさためなき世をたとへ(五・45) 飛花落葉の理也是より又四季の轉變をいへり古今序の佛をうつせり尤文章高き所及ひかき姿也

28 結ぶ泉の水におもかはりぬる老の姿をいとひ木の間の月の心つくしにも程なく更行影をおしみ(五・46) へ木の間よりもりくる月の影みれば心

つくしの秋は來にけり 結ぶ泉よりは是迄古哥ともの心にてか、れしとみゆ引歌多

くあるへけれどもひくにをよはず道理分明也

29 霜と雪と積るにつけてもきへやすき命と思ふにも (五・49) 是迄四

季轉變をいへる世世のはかなきありさまを見せたり古今序の詞に(春のあしたに

華の散を見秋の夕暮に木の葉の落るを聞あるはとし毎に鏡の影にこゆる(四三ウ)

雪と波とをなげき草の露水の泡をみてわか身をおとろき この序をさしうつつして

心を用ひかへて書れし也

30 朝夕は難波のよしあしをかたりあはせていにしへ今は別ぬるふしを

したひよるもひるも法華の軸をたのみて (五・51) 法華八軸也

31 同しはちすのうへを契をく (六・55) 夫婦は三世の宿執をかねたれば

一蓮託生を契る也

32 はかなき世におくれ先たつは (六・56) へ末の露もとの雫や世の中に

おくれさきたつためし成らん この心也引哥までもなし

33 かならず生れ所をつけしらせんともる共に誓ひしこと (六・57) 夫

婦の約束也このちかひしは約束の心也一蓮託生のちかひ也

34 なげきにあまる涙の床はとけてぬる夜もなければさたかなる夢をたに

も見す (六・58) 為家卿在世の時様く契りし事をさもなくて定成夢さへみ

ぬと也是人界のありさま也 (四四オ)

35 うつ、にとまる名残とてはなに、忍ふのとひとつにもあらぬわすれか

たみにも (六・61) 是は源氏あふひの巻になに、忍ふのいと、露げけれと

か、る形見さへなからましかはとおほしなくさむとあり此詞をいへりひとつにも

あらぬとは阿仏には子あまた有と也へ結び置しかたみの子たになかりせは何を忍

ふの夢をつままし 此哥の心にて申されし也あふひの巻のか、る形見さへとはあ

ふひの上の御子夕きりの事也是は御一子也しかるに阿仏はきんたちあまたなれば

ひとつにもあらぬわすれかたみと書給へり和哥の道の廣き所といふはかようの所

也

36 よるの鶴のこのうちの声たへす (六・63) 前にも注すよるの鶴の子を

思ふてこのうちになくといふ詩の心也

37 いたつらになげきかなしまんよりは仏のうてなにあつらへ奉り法の威

力をあふきて (六・64) 蓮盛をたのみ奉る法の力也爰の詞こそ阿仏のさと

りをひらかれし書さま也

38 めつさいしやうせんを祈らんにはしく事なくや連 (七・67) 滅罪生

善也つみをめつし善を生すとよむ也是をいのるより外にはしく事なしと也

39 けふの日にあたり給ひける地藏ほさつ一鉢のすかたを (四四ウ) 書あ

らはし奉る法華經一部 (七・68) 此けふの日とは為家卿の日成へし然は此

日に地藏菩薩の縁日にあたり給ふとなるへし法華經一部とは地藏ほさつの像を一

たい法華經にてかけりと也六万九千三百八十余字なるへし

40 同しくは是をくやうさんたんして (七・73) 供養とは爰は三宝に供す

るをいふ也讚嘆はほめなけくもたつとむかたち也

41 此功德をもて人道大納言の生れところを尋ねななき世のゆめをさまし

もとよりのさとりをあらはしてうへなきほたひにみちひき給へ (七・

74) 此功德は華の法華經又三經也菩提は梵語也仏の智慧也此仏のさとりを引導し

給へと也

42 仏はひさしく功をつみし仏きやうは命と共にちからを入し経也かくれ

てもあらはれても利益空しからし (八・78) 利益とは仏の衆生を仏意に

至らせんと思召をいへり爰もその心になる也(四五才)

43 このえかうあまねく法界におよほしてよろつのしゆしやうをわたさんと也(八・81) 及ほしては無邊法界に及ぶ也衆生とは釈迦(阿衍論に衆生は

生あるものをいふと云々 わたさんとは衆生済度の心にて舟にて海を渡す心也扱このえかう法界にあまねくとは(法花經三)卷化城喻品に。願以此功德普及於一切我與衆生皆具成佛道 此文をもつて斐定したり

44 とまる身はありてかひなき別ちに なとさきた、ぬ命也けり 建治元年六月五日 弟子敬白(八・87) とまる身は阿仏の身の上也この歌は三ノ

句よりよみはたしてとまる身はありてかひなきと也為家卿のわかれより何とてさきた、てつれなき命そと也此年号は前の道の記より廿二年程前也為家卿の追善か

正徳二辰年季冬写之 町尻三位殿(四五ウ)

▲東光山英勝寺鎌倉扇谷に有此地原太田道灌旧跡也太田氏英勝院禅尼念仏道場を営む其後水戸中納言頼房御息女雞染有て再興し住職し給ふ此境地北之方に阿仏尼塔有墓は京師大道寺にあり

▲綱引地藏浄光明寺の山中に有昔由比濱より漁父の網にかゝりて上り給ふとなん此寺平長時の建立にて宗旨八宗兼学也藤原為相卿塔は此地蔵の後山に有

▲月影谷極楽寺切通の西方昔爰にて曆を作りし者住し由爰阿仏尼筆蹟有極楽寺門外切通は由井濱へ出る切通し也

文化十五年寅如月寫(朱)

明真(花押・朱)〈裏見返し〉

注

(1)「十六夜日記」注釈書の新資料の報告—多和文庫蔵「十六夜日記」、拙稿、国文学攷第58号、昭和54年12月。多和文庫蔵「十六夜日記」(注釈書)の翻刻、前編、拙稿、四国大学紀要第1巻第2号、昭和57年3月。多和文庫蔵「十六夜日記」(注釈書)の翻刻、後編、拙稿、四国大学紀要第2巻第1号、昭和57年12月。

(2)「国学者伝記集成」下、上田萬年・芳賀矢一校閲、大川蔵雄・南蔵樹編、東出版、一九九七年九月後刻。近代文学研究叢書11「小杉楓邨」昭和女子大学近代文学研究室、昭和女子大学光葉の会、昭和34年1月。「郷土の発見—小杉楓邨と郷土史研究の曙—」徳島県立博物館編集・発行、二〇〇八年四月。「幻の写本 大澤本源氏物語」秋山虔・伊井春樹・池田和臣・後藤祥子他、宇治市源氏物語ミュージアム発行、二〇〇九年一〇月。

(3)「行啓記念北駕文庫蔵書略目録」第1巻、私設北駕文庫、三浦治編集・発行、大正三年四月。

後記

本写本の調査閲覧などに際しては、北海学園大学北駕文庫の福原正己氏、佐々木光子氏にお世話になりました。深甚の謝意を表します。

また、第一〇六回大会中世文学学会 平成二十一年度春季大会第三日における実地踏査「鎌倉—阿仏尼—」とはずがたり「関連地を訪ねて」においては、英勝寺から極楽寺までを踏査することができました。その際、会長

の高城功夫先生をはじめ、薬師川麻耶子先生など、多くの方にお世話になりました。あつく御礼申し上げます。